洞天研究事始め

—三浦國雄先生インタビュー—

話者：三浦國雄先生

聞き手：土屋昌明

日時：2021年12月19日

場所：巣鴨のホテル一室

土屋：先日の洞天研究会での先生のお話は、主として宋元明の文人たちが洞窟などの名勝を見て回る話を分析したもので、文化史的な研究と洞天の話と両方が入っていたと思います。先生が1980年代に「洞天福地小論」という論文をお書きになって、その影響がいまに至るまであるばかりか、世界中で取り上げられるようになっていきます。あの考察はいきなり出てきたんですが、どういふプロセスで出てきたものなののでしょうか。

三浦：なんでやったんかなあ……。あれは東北大から大阪市大に帰ってきた1982年、まず道教学会で発表し、審査を経て翌年の『東方宗教』第61号に載せてもらったものやけど、当時、道教学会長をされていた師匠の本田済先生から、何か発表してくれないかと云われたのがきっかけやった。それで、どういふテーマにしたらええか、その思案の過程で出てきたものです。なんで「洞天」になったのか、自分でもよく思い出せませんが、当時の道教研究の主流であった經典の成立研究は僕の性に合わず、何かテーマ研究をしたいとは思っていました。それが「洞天」になったのは、前々から関心のあった宇宙論と身体論とをこのテーマで結合できると思ったからやろね。当時のメモ書きを見ると、「宇宙—天地—洞天—道観・仙館—身体—心」というラインで何か出て来ないか」などと書いてます。それに、これは誰もやってへんなあと感じたこともきっかけになったはずです。それまでは朱子研究を中心にした儒学研究が主だったので、この論文が僕の道教研究の第一号になります。ケンキュウやなんて、ちょっと気恥ずかしいけど。

土屋：『真誥』を読まれていた時期とは違いますね。

三浦：そうやね。京大人文研で吉川忠夫さんが主宰された「六朝道教の研究」班は、第一期が1986年4月からの5年間、第二期が1991年4月からの5年間、この併せて10年間、研究発表を挟みながら『真誥』の全巻を精密に会読して、その皆さんの訳注稿をもとにして吉川さんが麥谷邦夫さんとともにまとめてその都度『東方学報』に発表したものを、研究報告『真誥（訳注篇）』として一括刊行されたのが2000年のことでした。この画期的な研究報告は今年（2021年）、上下の二冊本として臨川書店から索引も附され装いもあらたに再版され

❖宇宙論と身体論

❖真誥会読会

たよね。

御質問に戻りますと、『真誥』が洞天説の基本文献ということは分かっていたけど、1982年当時はまだ人文研の『真誥』研究会は始まっていなかった。だから、大阪に帰ってきて人文研の研究会に出させてもらったのは、柳田聖山先生が主宰されていた「禅林僧宝伝の研究」班やった。前々から禅には関心があったからね。

本題と関係ないことやけど、思い出したことがあり、ちょっと云わせてもらえますか。僕がこの『真誥』研究班に出させてもらったのは1993年の5月からで、班では「稽神枢篇第三」まで読み進んでいました。それまでは勤務先の都合とかで京都まで行けなかったのです。忘れもしません、例の1995年1月に発生した阪神淡路大地震では神戸の拙宅もエライ目に遭い、立っている物は全部倒されたんやけど、ちょうどその時、僕はこの研究班の当番に当たっていて、毎日訳注稿作りで悪戦苦闘してました。担当箇所は「握真輔第二」の冒頭からの数葉、まだ完成してなかったんで、大混乱の家の片付けに追われながらの作業はホンマに大変でした。当時マンションの理事長もしてましたので、そっちの仕事もありましたし。しかし、そんなことも云っておれず、なんとか仕上げましたが、寸断されていた交通手段の問題もあり、10日後の研究会には知り合いのメンバーに原稿を托してなんとか責めを果たしました。

土屋：『真誥』に洞天の詳しい話があるというのは、どうして気づかれたんですか。

三浦：これもなんでやったか思い出せないけど、当時の日記をひっくり返してみると、82年7月のところに、「真誥は一応全部目を通す。やはりこれが洞天福地の古典らしい」などと書いてんねんけど、何で知ったかは書いてない。

土屋：そうすると独力で『真誥』を読んでおられたら、相当読みにくかったんじゃないですか。

三浦：そうなんや。ある日の日記には『真誥』の漢文はなんでこんなに難しいのかと嘆いています。ただ、テーマが洞天福地やから、「稽神枢篇」を中心に関連箇所をチェックしていったようやね。

土屋：当時の先生の研究で、洞天説の成立の契機という問題を出されていて、それが6項目くらいあって、そのなかで地母神の信仰が関係すると真っ先にあがっているのは、どういうことでしょうか。それは1960年代から70年代の、エリアーズなどの宗教学の勉強を先生もされていたということですか。

三浦：あの6項目は古層から表層へと思いつくままに列挙していったもので、地母神を真っ先に挙げたのは、それが最古層に属するからだと考えていたからやろね。洞窟と地母神の結びつきについては、あの論文の注1に引いているように大室幹雄さんの『囿碁の民話学』（せりか書房、1977年）からもヒントを得たと思う。この本はおもしろかった。この人にはかなわんなという

❖洞天説と地母神

思いもあった。

エリアーデは当時の僕には敷居が高かった。小南一郎さんの『楚辞』（筑摩書房、1973年）は彼の人文研の助手時代、30歳そこそこで出した本で、学界、読書界に大きな衝撃を与えましたが、あそこにエリアーデのシャーマニズム論が原書から引かれていて、彼と同じ研究所で助手をしていた僕なんか、仰ぎ見るしかなかった。つい近年でも、僕の敬愛する作家・日野啓三さんが本書を引いて、「人類史の大きな転換と変質、その裂け目での集会的な魂の大いなるドラマ」を教えられたと激賞しておられる（『書くことの秘儀』集英社、2003年、142頁以下）エリアーデと云えば、僕が彼の『ヨーガ』（せりか書房、1981年）を読んだのはもっと後年のことです。

土屋：洞天の場合は、洞窟がやはり女性の生殖を連想させるかたちで、子宮に回帰するという考え方にもとづくわけで、そういうところから地母神ということが出てきたのでしょうかね。

❖墓と洞窟

三浦：そうやろね。地母神は老子によって「玄牝」として概念化・哲学化されたと思うけど、その一方で原始信仰みたいなものは生きていたはずで、子宮はWOMB、墓はTOMBだから、墓＝洞窟は死の空間であると同時に再生の場所というのは中国でも云えるわけで、姜生さんの新刊『漢帝国の遺産』（東方書店、2020年）は、漢代において墓は「生命転換装置」だった、というのがライトモチーフになっています。本誌第9号に掲載してもらった拙論「墓室から洞天へ」は、姜生さんのこの考えを承けて、それを「洞天」成立の文脈に組み込んだものです。

これはまだ活字にはなっていませんが、僕はその続篇みたいなものを構想しています。つまり、『真誥』では「洞天」は「稽神枢篇」のものとして「闡幽微篇」のものとして二つに分かれていて、仮に前者を「仙の洞天」と呼ぶと、後者は「鬼の洞天」と呼べると思うのですが、これらの源流は一つで、墓室が分化していったものではないかと思うのです。六朝期にはその両者が「洞天」として混在していたのを、陶弘景が『真誥』を編集した際に別種のものとして整理したのではないかと考えています。魏斌さんの近作『“山中”的六朝史』（三聯書店、2019年）では、すでに「仙府」「鬼府」として問題が立てられています（199頁以下）。お尋ねの文脈からちょっと逸れたかもしれませんが。

土屋：当時、中国学以外のところでこういうことが語られていた、そんな中から先生のお考えが出てきたんじゃないかと思うのです。そのあたりのコンテキストというか、流れをうかがいたいと思ったのです。そのころ私は学生だったから、はすっぱなことに興味があって、地母神といった話も読んだことがありました。ユートピアの概念と地母神の関係もどうなっていたんでしょうね。当時、種村季弘さんとかは、そういうのを盛んに書いていらした。だから、ある日、種村さんの家におじゃましてお酒をいただいていたら、「きみは中国の

ことを勉強しているなら、三浦國雄を読め」と言われたんです。

三浦：その話は土屋さんから何度か聞いていて、たいへん名誉なことやと思っています。種村さんは朝日新聞書評欄で拙著を取り上げてくださり、のちに御自分の書評を集めた『遊読記』（河出書房、1992年）を献辞付きで僕に送ってくださった時には、なんて御丁寧な方かとビックリしたね。僕は以前から種村さんの本は好きで、あの人の奇想と驚異的な博学には圧倒され続けていた。種村さんは、自分の考えが断片的にもあの本（『中国人のトポス』）に入っているということで共感してくれはったんやと思うけど。あの本に収めた拙文「中国人の天と宇宙」で、種村さんが訳されたというか、「訳論」になっている、ベルヌーリの『錬金術—タロットと愚者の旅』（青土社、1980年第5版）も引いているしね。

❖種村季弘さんの書評

大室さんの話に戻るけど、ごっつい三部作を出してはるよね。あれはいつごろやったかな。

土屋：確か同じころですね（『劇場都市』1981年、『桃源の夢想』1984年、『園林都市』1985年）。先生は大室幹雄さんの本を読んでいらしたのですか。

❖大室幹雄さんの三部作

三浦：あの頃の日記見ていたら、洞天論を構想しながら『劇場都市』を読んでいたから、ある種の影響は受けたと思う。あとの二作は洞天論文を書いたあとに出たものやけど、あの三部作は洞天論とは別にもう一回ちゃんと読まんとあかんと思っています。といっても、あのパワフルで圧倒的な文体と格闘する気力はもう残ってないけどね。それから、僕の論文は洞窟論ではあるけれど、洞窟が洞天へと展開したところに力点を置いています。

土屋：大室さんとは学会で接点があったわけではないですね。単行本で発表するという人でしたから。

三浦：面識はありません。あの人は学会とかに来るような人ではなかったからね。

土屋：前に先生にうかがったんですが、スタン（Rolf Stein）の『盆栽の宇宙誌』（せりか書房、1985年。原著：Jardins en miniature d'Extrême-Orient, le Monde en petit, Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient (Hanoi, Paris), XLII: 1-104.1943）の書評を書いたときに随分精読されたということですが、あの本も洞天と関係しますね。

❖スタンの『盆栽の宇宙誌』

三浦：そうや。あれは福井文雅さんと明神洋さんが訳された本やね。洞天論文の発表後、道教学会から書評が回ってきたので拝読したけど、とても面白かった。著者の師マルセル・グラネ（Marcel Granet）の大宇宙—小宇宙論の具体的検証をすると同時に、「師の園芸の趣味を記念」するために書かれたとスタンは云っているけど、なんというか、フランス・シノロジーの文献渉獵力もさることながら、豊饒なイメージの喚起力みたいなものには参ったね。そこを貫く原理は、「小宇宙の中に大宇宙があり、自然は小さければ小さいほど霊力と

活力を獲得する」というもので、だから盆栽は仙境となり洞天となると、洞天論も組み込まれている。「洞窟は互いに地下道でつながっている」などと書かれていて、スタンたちは『真誥』を読んでいたのではと疑われるけど、原注に『真誥』は引かれていない。スタンさんがこれを書いたとき 32 歳だったと福井さんは解説で書いておられるけど、そうするとこの仕事は 1940 年代のことになる。スタンさんはチベット研究で有名な方やけど、若い時にこんな先駆的な仙境研究をされていたとはね。

それから、僕は中国の庭にも関心があるんやけど、この本の原題が「極東の小型の庭—世界の縮図」になっているように、中国の庭園を考察する場合にも有益やと思います。

土屋：やはり 1980 年代は生産性が高い時代で、いまからみても古くなっていないような研究や著作がいっぱいあると思うんです。そういう意味では、いまの私たちは退化している。新しいことに気が付いたといっても、調べてみると、そんなことは 80 年代にいわれているよ、ということが多い。

❖ 上海留学と気功

三浦：そんなこと、考えたこともなかったけど、あんたの眼からみると、80 年代というのは割と豊穡だったというわけか。豊穡だったのか貧しかったのか、僕にはよう分からん。僕の話に戻ると、勤め先から半年のサバティカルもらって上海に留学したのが 87 年、46 歳のことやった。若い頃は留学できなかったのも、あれは有り難かった。「中国」なるものを实地に体験することが最大の目的やったけど、当時、中国は気功ブームの真っ最中で、現場で身をもって気功を学びたいと願っていた。前々からココロよりもカラダの問題に関心があって、気功はすでに僕の視野に入ってきていた。津村喬っていう人がいて、このまえ亡くなりましたけど、84 年 3 月、淡路島で気功の合宿をするって新聞に津村さんの短い広告が出て、飛び入りでその 2 泊の合宿に参加してね、気功や太極拳はおもしろいなと思った。それ以来、津村さんは僕の気功の師匠やと思ってます、ろくに気功の実践ができない不肖の弟子やけどね。自分のカラダを介して道教をもっと身近に引き寄せられないか、という思いが僕を気功に引き寄せたわけです。そういうことを、道教をやっている人に洩らしたら冷笑されたのはよく覚えている。そのことはともかく、洞天のテーマはそこに乗ってきたわけや。僕の洞天論が、宇宙—山—身体という三題嚙みたいになっているのはそういう関心とつながっているわけ。その身体のポイントはアタマにあって子宮じゃないけどね。子宮方面は加藤千恵君がやっていて、彼女の『不老不死の身体—道教と『胎』の思想』（大修館、2002 年）については、これも種村さんが朝日新聞紙上で書評を書いて下さったよね。

❖ 青い洞窟というイメージ

土屋：先生のある論文では宇佐見英治さんの「青い洞窟」という語を引用されていて、私もそれが掲載されている『雲と天人』（岩波書店、1981 年）を読みました。ご本人は研究者ですが、書いてある内容はエッセーでした。

当時、私が大学で学んでいた頃は、学術的な論文とそういうエッセーみたいなものは別だと教わっていて、それを先生はあのようなれっきとした学会誌の論文の中で引用されていましたね。ああいう学風というか、先生のそういうところは、どういうふうに出てきたのでしょうか。

三浦：宇佐見先生はフランス文学研究者というより詩人やね。あの特異な彫刻家ジャコメッティとも親交があった。詩はそんなに書いておられないけど、先生もそう自認しておられたし、僕も本質的に詩人やと思ってます。僕は、学問はこういうもんやっていうのが嫌いで、もっと自由なものじゃないかと思うていたし、京都へ行っているんなものを読んだり学んだりしていても、ちょっと違和感を感じることもあって、もっといろんなやり方があっていいのではと思っていた。僕が師事した本田濟先生、島田虔次先生、入矢義高先生などは別格で、そんな自由を認めてくださる器の大きさがあった。僕は論文なるものの作法は知らないわけではないけど、宇佐見先生のセンスや洞察力は僕の中では特別やし、立論のヒントになったものは礼儀として引くべきやと思っています。「青い洞窟」やなんて、洞天の本質を鮮やかに捉えていると思う。これは秋吉台の秋芳洞を訪れた時の印象がもとになっているようやけど、そこで先生は「この蒼穹、われわれがその下方にいる碧落そのものが洞天なのか」と、「洞天」という語を使って「青い洞窟」としてのこの世界を捉えておられる。この一文を収める『雲と天人』という本は1981年の出版で、僕は先生から献呈されたこの御著書を1981年の11月に読んでいる。僕の「洞天」の構想はそれ以前からあったわけやけど、我が意を得たりと励まされてあの小論に引いたわけです。論文かエッセーか、そんなことはどうでもいいわけ。

土屋：宇佐見先生とはおつきあいがあったんですね。

三浦：あった、あった。もともと白井晟一という建築家がいる、ソウルの宗廟を「東洋のパルテノン」と呼んだ、建築界では超著名な人やけど、僕が依頼されてその『白井晟一研究Ⅱ』（南洋堂、1978年）に宗廟論を書いたことからその大先生の御息と御縁ができて、そこから宇佐見先生に繋がったのだと思います。この『研究Ⅱ』に、宇佐見先生も「夢の口」と題された文章を寄せておられる。それ以来、2002年に他界されるまで、先生は本を出す都度、僕に贈ってくださって、20冊近くもいただいています。僕も駄文を草するたびに先生に献呈しましたが、その都度、適確な批評を頂戴しました。先生はもとも大阪のご出身でね、関西にいらしたときに神戸の拙宅に来て下さり、粗餐を差し上げたこともあります。勿体ない話やわ。

土屋：それは70年代ですか。

三浦：宇佐見先生の知遇を得たのは70年代の末、僕が仙台に居た頃のことです。先の「青い洞窟」の続きをちょっと補足させてください。実は、先生はその名も「洞天福地」と題された文章を書いておられて、そこで拙論を引いて

❖宇佐見英治先生の知遇

下さったあと、「洞天福地の観念には、管理を嘲る万に一つの偶然性のおもしろさ、とぼけたユーモアがある。さらに洞天福地という観念は洞窟がすべて入り口はあっても出口がなく、閉ざされた闇の実体であるという常套観念を打ちやぶる」などと書いておられます（『方円漫筆』所収、みすず書房、1992年）。

❖種村さんと壺中天

土屋：種村季弘さんとは「洞天福地小論」以降のおつきあいですか。

三浦：宇佐見先生とのような直接の交流はもとよりなかったけど、あの人のグロテスク論やマニエリスム論などは20代くらいから好んで読んでいた。だから、あの先生が僕の書いたものを面白がってくださってとても嬉しかった。種村さんについてはもう一点、『壺中天奇聞』（青土社、1979年）も挙げておきたい。この本の核心は、同じタイトルで収められている稲垣足穂論やと思うけど、そこでは「壺中の観念連合」が自由自在に語られている。ついでに云うと、これは『トポス』所収の「洞庭湖と洞庭山」にも引いたけど、富岡多恵子さんの『壺中庵異聞』（文藝春秋社、1974年）なんかも面白かった。「壺中天」と「洞天」とは通底しているからね。この本は、豆本作りに情熱を燃やす人の話です。そのミニチュア本の中身はどういうものか、それは読んでのお楽しみ（笑）。

❖ドイツ文学から中国学へ

土屋：私は、はじめ先生の書いておられるものを読んで、このかたはドイツ文学の経験があるのかなと思ったのですが。

三浦：そう、当初はドイツ文学に行くつもりやった。リルケの『マルテの手記』が愛読書やったというところちょっとキザになるかな。大阪市大に入学した時、英語は取らず、ドイツ語と中国語を履修した。義則孝夫先生のトーマス・マンの講読の授業に出て、ドイツ文学の専攻生に混じって原文の読みを担当したこともある。あれは大阪市大の修士課程時代のことやけど、中国学の授業に出るかたわら、ドイツ語の岸田晩節先生の演習にも出ていた。この先生は著書とか翻訳とかは出されず、世間的にはあんまり有名ではなかったけど、ものすごく実力のある学者で、特にテキスト読解の無類の精密さは僕の耳にも届いていたので受講したわけです。その時のテキストは、ヴォルフガング・カイザーの『DAS SPRACHLICHE KUNSTWERK』（言語芸術作品）というもので、この時の経験はのちに注疏を読む時に大いに役立った。そのことは、大阪市大の中国学会誌『中国学志』（2019年、大壮号）所載の「日本漢学の“読原著”伝統 — 一老書生の回憶—」と題した拙文に書いてます。この時の副産物が「空間の造型 — 『西遊記』 演変私考—」という一文で、これはカイザー理論で『西遊記』を分析したもので、例の『トポス』にも収めましたから、ドイツ文学出身の種村さんも読んでくださったはずですよ。

土屋：そこまで来るとどうしても、じゃどうして中国に、ということになっちゃうんですが。

三浦：なんでかなあ。どこでチャンネルが切り替わったのか、自分でもよう

土屋：さっきの大室幹雄さんはやっぱりドイツですね。話が本のほうに戻りて最良の案内書やった。

Comment on communiqué avec eux) は、道教の勉強を始めた当初の僕にとっ
1966年、のちに平凡社東洋文庫。原著：Le Taoïsme + Les dieux taoïstes :
されたマスペロ (Henri Maspero) の『道教—不死の探究』(東海大学出版社、
ペール (Kristofer Schipper) 先生の存在はやはり大きい。川勝義雄先生が訳
がさかんに視界に入ってくるからね。今年 (2021年) 2月に仙去されたシッ
から。中国学、特に道教なんかをやっていると、やっぱりフランス・シノロジー
三浦：当時やなくて、一応中国学の専門家として大学に勤めるようになって

❖ マスペロの道教学

土屋：当時？

な、と思うことがしばしばあったな。

しかし中国学をやるにつれ、やっぱりフランス語もやっていた方がよかったか
三浦：カイザーのむすかしいドイツ語を岸田先生から教わったわけやけど、

いたのは正しかったわ。

80年代に私が『中国人のトポス』を読んだ時からドイツ文学の感じを受けて
土屋：そうすると、先生のご研究にはドイツ文学の底流があるんですね。

本田清先生との出会いが決定的やった。

どもね。未開拓の処女地がいっぱいあるのは事実やけど。学部に進んでからは
れてそがっちりした「漢学」の要塞にぶち当たって難儀することになんねんけ
あるように見えたから、としか今は云いようがない。大学院に進んでから、そ
要塞みたいなものはなく、自由なアプローチを許してくれる余地がふんだんに
愁を中国に感じたことと、中国学にはドイツ文学みたいにかっちりした堅固な
フーもええとこやね。ドイツ文学科でなく中国学科を選んだのは、ある種の郷
た。記憶力と記録力が尋常でない。僕なんかその対極の人間で、ワーワー
けど、彼が自分の80年に亘る生涯のことを事細かに再現できるのに驚かさ
会録が2023年1月に出る予定になっていて、僕もその座談会に出たわけや
遊が続いてんねんけど、彼を囲む「学問の思い出」という東方学会主催の座談
30歳の時に人文研の朱子語類の研究会で知り合いになって、以来50年の交
幸夫という同じ1941年生まれの人間がいて、その専門は朝鮮語と書誌学、
けたわけでもないし、新中国にユメを托したわけでもない。僕の老朋友に藤本
が大キラの典型的なソボリ人間やったから、そういう御時世の影響を受
保人ソタイで国中が大揺れした政治の時代やっただけど、僕は右でも左でも党派
漢文そのものがキラキラやっただけではない。僕が入学した1960年は、例の安
入って中国語を履修する気持ちになったのはホソマに自分でもよ分らん。
わせるような陰気ささい人で、下向いてボソボソ喋ってはった。それが大学に
えてるけど、漢文の先生はNという、明日にでも自殺するんとかやうかと思
分かんところがある。高校の漢文の授業は全然面白くなかったし。今でも憶

❖林屋洞行

ますが、蘇州の林屋洞に行っている話があります。あれはどういうことだったんですか？

三浦：僕の『トポス』に収めた例の「洞庭湖と洞庭山」という文章ね。あれは先述したように1987年、大阪市大からサバティカルもらって上海に半年おってね、師匠の祝瑞開先生からマンツーマンの授業を受け、公園に行っただけで無名の気功師たちから気功を教わる以外は、各地を旅して回るという、まさに至福の半年やった。その時に行った場所の一つが江蘇省太湖で、お目当ては湖中の島・洞庭西山にある第九洞天の林屋洞やった。洞内は、けばいイルミネーションも点灯されて観光地化されていたけど、観光客はあそこに書いておいたように上海と南京から来たという数人だけでした。洞内は複雑な構造になっていて、そのすべてを見て回ったわけではなかったけど、洞天と呼ばれた実際の洞窟を実地に体験した意味は大きかったね。この上海時代ではなかったけど、茅山の華陽洞天にも行ってます。先年、成都の四川大学に居た時には峨眉山にも行ったし、中国の院生つれて一緒に広東省の羅浮山にも遊びましたが、その時は「洞天」は探し当てられませんでした。

❖朱熹の墓

土屋：当時は中国の現地に行くっていうのは、意外とできなかったのでは？

三浦：87年当時はたしかにそういう一面はあった。福建省に行って朱子の遺跡を巡り歩いた時、目玉は黄坑に現存する朱子の墓だったのですが、あそこは外国人には未開放地区だと云って国際旅行社がしぶった際、じゃ、勝手に行くよと半分脅迫して車を出させるのに成功したこともあった。あの旅の一部始終は、『トポス』中の「朱熹の墓」に書いています。

土屋：やっぱり時間が足りませんね（笑）。とりあえず80年代の「洞天福地小論」のあたりは聞けましたが…。

三浦：インタビューを受けるなんて初めての経験やし、こんな話、皆さんのお役に立つかどうか、自分では大いに疑問があります。ただ、僕の立場から云わせてもらおうと、僕の論文が世界の皆さんに読まれていると冒頭に土屋さんが云ってくれたけど、それはひとえに土屋さんをはじめ、この洞天研究会の皆さんのお蔭です。自分の仕事を継承してくださる後輩を生前に見届けることができるなんて、学者冥利というものやね。まだ死にませんけど（笑）。